日刊 動労千葉
1988.2.29
No2767
国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

『ただ働き運動』をブチ上げた「東鉄労」委員長松崎明

二月六日の「東鉄労」大会は、およそ労働組合を名のれるものではなかった。一月八日に開かれた「労使懇談会」の席上、革マル松崎は、「大東亜共栄圏」の復活を叫び、「会社のためには、ただ働きしろ」と戦前の軍部ばりの超右翼的本性をあらわにした。また、「東鉄労」大会も革マル一色に塗つぶされ、そこでも松崎は、日帝の危機、会社の危機を声高に叫び、労働者を会社に売り渡し、自分は奴隷頭となってムチを振う、と当局に誓った。これには、さしもの旧鉄労からも不満がうずまき、今や鉄道労連はガタガタ、解体の危機を向えている。

労働者は奴隷、ただ働きしろ

「東鉄労」方針は徹底して会社の側に立ったものであり、どれ一つとっても怒りなしに読むことの出来ないものであるが、その中で遂に彼らは「働こう運動」から「ただ働き運動」にまで行きついた。「日本はヨーロッパと違ってただ働きする」「会社のためには三年間賃上げがまん」これが松崎の発言だ。これではあまりに露骨と思ってか、「東鉄労」大会では「賃上げ、六～七％で取り組む」としながら、同じ方針書の中で「賃金は私たちのつくり出す経営実績にもとずき決定されるべき」と言いはなち、「まだJRは経営基盤が弱い」だから賃上げどころか身を粉にして会社につくせというのだ。いかに「東鉄労組合員」と言えど、働いても食えなくなった時はどうなのだ。三年たてばバラ色のJRとでも言うのか。

企業＝支配者の立場で首切りを叫ぶ

さしもの住田も動労千葉・国労だから首にするとまでは言えないが、松崎は平然と言いはなつ。「会社に不必要なもの（動労千葉・国労）を排除するのが資本の論理」と。国鉄当局は「分割・民営化」の強行で、運転職場から徹底して国労組合員を排除し、「六三・三ダイ改」では駅からの排除を画策し、かたっぱしから売店等へたたき込まんとしている。すでに、「西日本」では売店等の全員強制出向の攻撃が始まった。住田の「二万人出向」発言を先取りし、首切りを叫んでいるのが松崎だ。

「大東亜共栄圏」を復活させろ

「大東亜共栄圏は必要だし、正しい……日本民族は優秀」これは、中曽根や、勝共連合の発言ではない、松崎の発言だ。戦前の「大和民族優秀論」と一言一句変らぬ差別に貫かれた侵略者の思想そのものである。かって天皇を頂点にいただき、アジア人民を殺りくし、焼きつくさんとしたあの侵略戦争を正しかったと言い、今日では革マルがその手先となると誓ったのだ。まさしく現代のヒットラーだ。

「東鉄労」大会では、自民党支持を公然とさせた。「東鉄労方針を支持し、賛成する政党と支持協力をはかります」と、一体、「東鉄労・革マルを支持する政党が自民党以外のどこにある。むろん、彼らから自民党にすり寄っているからに他ならないのだが。

革マル・鉄道労連を解体しよう

鉄道労連はガタガタだ。会社と一体となって目論んだ鉄産労の吸収は破綻し、旧鉄労、旧職制の革マル嫌いは消しがたく、いたる所で不満はうずまいている。「東日本」を見よ、動労千葉と総連合が闘いぬき、日共の屈服という中にあっても今なお二万人が国労の旗を守りぬいている。動労（旧水戸地本）が存在する。鉄産労の吸収も失敗した。一企業一組合など夢でしかない。

革マル・鉄道労連解体・打倒をかちとろう。

差しかえられた「週刊現代」！

昨年暮れ発行の「週間現代」に掲載された、東日本住田社長のインタビュー記事の一部が、一旦印刷されながら、回収され差しかえられた。差しかえられた部分には、インタビューに答えるかたちで、住田自身が、松崎は革マルであり、当局内部にも革マル不信が渦巻いていて困ってる、と語られていたのである。1月8日の松崎による「大東亜共栄圏」「ただ働き」発言は、このような危機においつめられた松崎が、より決定的な忠誠を示すことで、権力にすがって生きのびようとしたものであることは明らかである。

労働組合はどうですか。
「今は落ちついているようですね、国労を事実上つぶしましたから。東鉄労というのが最大の組合ですが、委員長の松崎さんは、私どもに非常に協力的です。でも管理者の間に革マル不信が強くて、これが問題です」

右の記事が、たんなるプロフィールに差しかえられた。

大正二年5月26日生まれ、65歳、東大法学部卒。昭和22年に運輸省へ入り、港運、鉄道と主に交通事業を担当、昭和53年に事務次官となる。退官後の58年に国鉄民営化をはかる日本国有鉄道再建監理委員会委員に選ばれ、大きな推進力の役割を果たした。官僚的体質を感じさせないユニークな発想の持ち主として知られ、趣味は読書とゴルフ。